

意味論の内と外

——トマス・アクィナス《esse》《significare》——

加藤 雅人

本論が主題とするのは、トマス・アクィナスにおける《esse》や《ens》の意味である。だが、トマスにおける「存在」を必ずしも主題とするわけではない¹⁾。トマスの「存在」については、すでに「存在論」の観点からの膨大な量の先行研究があり、われわれはそれに何かを付け加えようとしているわけではない。われわれの意図は、これまで「存在論」の観点から論じられてきたものを、「意味論」の視点から照明しなおすことである。そのことを通して、トマス哲学において意味論はその核心部分にあること、そして彼の《esse》や《ens》の意味論には、「意味論的2区分」という一貫した視点があることを主張したい。

1 なぜ、意味論なのか

「意味論」は、言うまでもなく語や文の意味についての理論であるが、「存在論」(onto-logia)もまた「論」(logos)である以上、存在をあらわす語彙の意味分析が不可欠である。したがって、どこまでが意味論でどこからが存在論であるかを明確に区別することは容易ではない。しかし、意味論の焦点は言語分析にあり存在論の焦点は言語によって意味表示される存在の探求にある。トマスが体系的な意味論をもっていたと主張するつもりはないが、少なくともこの区別をトマスは承知していた²⁾。われわれの考えでは、彼の《ens》や《esse》という語（およびそれらを含む文）についての論を理解するためには、「文法形式」と「論理形式」、「対象言語」と「メタ言語」、「使用」と「言及」、「表示」と「指示」、「意義」と「指示物」、といった意味論的区別の視点が有効

である。

だが、そのような意味論的分析はいわゆる「言語論的転回」(linguistic turn) 以前のトマスにとってはそもそも無縁ではないのか？ この問に対して、意味論的分析はトマス哲学にとってたんに重要なだけでなく、その核心部分にあるとわれわれは考える。まずそのことを、文法形式と論理形式の区別という視点から確認しよう。

言語分析を哲学の主務とみなした分析哲学は、伝統的存在論の問題を意味論の問題へと転換した。ラッセルは、文の「文法形式」(grammatical form) と「論理形式」(logical form) を区別し、自然言語においては見かけ上の文法形式が真の論理形式をしばしば誤解させることを指摘した³⁾。たとえば《フランスの現在の国王》(the present king of France) という確定記述は、その文法形式がどうであれ、特定の個人を「指示する」表現ではなく、そのような個人が存在すると「主張する」表現であると分析されなければならない。したがって、《フランスの現在の国王は禿げている》という文は、「フランスの現在の国王であること」および「禿げていること」という2つの属性をもった特定の個人が存在すると主張する(偽なる)文である。また、《フランスの国王は存在しない》という文は、その文法形式がどうであれ、論理形式においては、『フランスの国王であること』というような属性を持った個人は1人もいない』ということを実証する(真なる)文なのである。

トマスも、「Xがある」という文法形式をもった命題のなかには、それとは異なる論理形式をもったものがあると考えていた。たとえば、《caecitas est》という文は、その文法形式どおり、《caecitas》という語が指示する「盲性」が《est》という語が指示する「存在」という属性をもっているという意味において、「盲性が存在する」ということを意味するわけではない。「盲性」とは「視覚の欠如」であるから、それに「存在」を述語すること自体そもそも矛盾である。したがって、《caecitas est》という文は、真の論理形式においては、盲性という概念を述語とした真なる命題が形成されうるということ、すなわち、「あるものが盲である」あるいは「あるものに視覚が欠けている」ということ

を意味する。トマスは、このような文法形式と論理形式の区別の視点からの分析を繰り返し行っている⁴⁾。

キリスト教哲学者トマスにとって、神の存在を人間がどのように理解できるかということ、また神が創造したこの世界に悪が事実として存在することをどのように説明するかということは核心的な問題であったはずである。そして、そのような根本問題に対するトマスの解答の鍵が、《Deus est》や《malum est》という文の文法形式と論理形式の区別という意味論的分析にあった。

トマスの分析によれば、《Deus est》という文は、「われわれの理解に関する限り」(quoad nos)⁵⁾、その文法形式どおり、《Deus》という語が指示するものに《est》を述語して「神が存在する」ということを意味するのではなく、「この命題が真である」ことを意味する。それが真であることをわれわれは結果の原因に対する関係から知る。

《esse》は2つの仕方で語られる。1つは、あるという現実態を意味表示し、また1つは、命題の結合を意味表示する。この結合は、心が述語を主語に結合するとき見いだすものである。—そこで、《esse》を第1の意味にとるなら、神の本質と同様、神の存在もわれわれは知ることができない。ただ第2の意味においてのみ、知ることができる。というのも、《Deus est》と言うとき、神について形成するこの命題が真であることを知るからである。そして、このことを、すでに述べられたように、神の結果から知るのである⁶⁾。

結果から知られることは、「神が存在する」ということではなく、「何ものかが神である」ということである。神の本質も存在も人間の理解を超えているが、「何ものかが神と呼ばれうるような第1動者、第1作出因、自体的必然、あらゆる完全性の原因、自然物の目的としての知性認識者である」ということは理解できるからである⁷⁾。

同様に《malum est》という文も、その文法形式どおり「悪が存在する」と

ということではなく、「その命題が真である」ことを意味する。トマスにとっては、「悪」とは「善の欠如」であるから、ちょうど《caecitas est》の論理形式が「あるものに視覚が欠けている」ことであるように、《malum est》の論理形式は、「あるものに善が欠けている」ことであると分析される。

《ens》は2つの仕方で語られる。1つは、十の範疇に区分されしたがって実在と置換されるような、実在の有性を意味表示するかぎりにおいてである。そして、この意味では、いかなる欠如もエンスではない。それゆえ、悪もエンスではない。もう1つは、命題の真理を意味表示するものがエンスと言われる。真理は結合において成立し、この結合のしるしが《est》というこの述べ語なのである。これは、「～なるものがあるか」という問に応答するためのエンスである。この意味で、盲は目の中にあると言われ、何であれその他の欠如があると言われるのである。そして、この意味では、悪もエンスであると言われる。一ところが、この区別を知らないために、ある人々は、ある種の実在が悪と言われ、悪は実在においてあると言われるのを考慮し、悪は何らかの実在であると信じたのである⁸⁾。

以上から明らかなように、トマスは「神の存在」や「悪の存在」という核心的な問題を、文法形式（表層構造）と論理形式（深層構造）の区別という視点から意味論的に分析している。したがって、意味論がトマス哲学の核心部分にあることは間違いない。

2 存在論、それとも意味論

上に引用した2つのテキストにみられる《esse》や《ens》の意味論的分析は、トマスの存在論の前提となっている。トマスによれば、一般に「何であるか？」の問よりも「あるか？」の問いが先立ち、「何かがある」ことを証明するためには「語が何を意味表示するか？」ということの理解が前提となるからである⁹⁾。

トマスの存在論は、基本的に《ens》、《esse》、《essentia》といった「ある」を意味するラテン語（およびそれらを含む文）によって意味表示されるものについての「論」である。したがって、それはアリストテレスの onto-logia とは違って、いわば enti-logia である。トマスの enti-logia を理解するには、つぎの3つを意味論的に区別する必要がある。(1) 存在論の対象となるもの、(2) (1) を意味表示する言語、(3) (2) について説明する言語。

このうち、(2) と (3) の区別は「対象言語」(object language) と「メタ言語」(metalinguage) の区別として知られている¹⁰⁾。これは言語の機能上の区別であるから、両者は同一の言語体系であってもよい。トマスは《esse》や《ens》というラテン語（対象言語）について、同じラテン語（メタ言語）で説明し、われわれは日本語（メタ言語）で説明している。厳密に言うと、われわれは《esse》や《ens》というラテン語（対象言語）についてトマスが説明しているラテン語（メタ言語）について、日本語（メタ・メタ言語）で論じている。

また、ある表現が (1) をさすか (2) をさすかという区別は、表現の「使用」(use) と「言及」(mention) の区別として知られている¹¹⁾。たとえば、《京都は古都である》という文において、《京都》という語は実在する都市をさすために用いられている（使用）のに対して、《京都は都市名である》という文において、《京都》は《京都》という語そのものをさしている（言及）。このような「使用」と「言及」の区別を、トマスも承知していた。表現の「使用」を彼は「形相的に、意味表示が実在にかかわる」(formaliter, secundum quod eius significatio refertur ad rem) 用法と呼び、表現の「言及」を彼は「質料的に、音声を意味表示する」(secundum quod materialiter significat ipsam vocem) 用法と呼んで、両者を区別している¹²⁾。

一般に、自然言語で自然言語を説明しようとするとき、以上のような区別がときどき曖昧になることは否定できない。しかし、《esse》や《ens》という語について、トマスが「2つの仕方で語られる」(dupliciter dicitur) と説明する一連のテキストを理解するためには、以上のような、「対象言語」と「メタ

言語」の区別，そして表現の「使用」と「言及」の区別という意味論的分析の視点が有効である。

われわれが意味論的分析の対象とするのは，主として次のテキスト群である。[1] *De ente et essentia*, 1, [2] *In I Sent.*, 19, 5, 1, ad1, [3] *In I Sent.*, 33, 1, 1, ad1, [4] *In II Sent.*, 34, 1, 1, c, [5] *In II Sent.*, 37, 1, 2, ad3, [6] *In III Sent.*, 6, 2, 2, c, [7] *S. C. G.*, III, 9, [8] *De potentia*, VII, 2, ad1, [9] *Quod. IX*, 2, 2, c, [10] *S. T.*, I, 3, 4, ad2, [11] *S. T.*, I, 48, 2, ad2, [12] *De malo*, I, 1, ad19

このうち，[10] と [11] は上に引用した。それらと並んで典型的なのは，次のテキスト [1] である。

ens per se は 2 つの仕方で語られる。1 つは，十の類に区分されるもの，また 1 つは，命題の真理を意味表示するもの，である。ところで，この両者の違いは次の点にある。すなわち，第 2 の意味では，それについて肯定命題を形成しうるものはすべて，たとえそれが實在に何もおかなくても，エンスと言われうるのである。この意味では，欠如や否定もエンスと言われる。というのも，肯定は否定に対立する，盲は目の中にあると言われるからである。しかし，第 1 の意味では，實在に何かをおくものしかエンスと言われえない。したがって，第 1 の意味では，盲などはエンスではないのである¹³⁾。

一連のテキストにおいて，《ens》や《esse》という語が《significare》の主語となっているとき，それらの語はそれらの語そのもの（あるいは，それらの語によって代表されている語）をさしている（言及）。「意味表示する」のは實在ではなく言語だからである。この場合，トマスの説明はメタ言語による意味論的分析である。これに対して，《ens》という語が《dividitur per decem genera》の主語となっているとき，それは實在をさすために使われている（使用）。「十の類（範疇）に区分される」のは實在だからである。この場合，

トマスの説明は対象言語による存在論的分析である。

トマスが《ens》や《esse》について「2つの仕方で語られる」と説明する一連のテキストを、フェレスは ens ut actus essendi と ens ut verum の「存在論的2区分」(ontologische Dichotomie) という存在論の観点からのみ解釈しようとして困難に直面した。フェレスは表現の「使用」と「言及」という意味論的区別を無視したため、「2つの仕方で語られる」ものが、ある時は《ens》、ある時は《esse》、またある時は《ens et esse》とされている理由が説明できなかったのである¹⁴⁾。

もちろん、トマスのテキストには必ずしも「使用」と「言及」を識別する標識はなく、その区別はしばしば曖昧である。だからといって、フェレスのようにこの区別を無視すると、意味論と存在論を混同しテキストの誤解を招くことになる¹⁵⁾。このような意味論的視点の欠如は、フェレスのみならず多くのトマス研究に蔓延している。とくに、トマスの言う《ens》や《esse》の2区分のうち、後で説明する「意味論的世界においてはたらく」《ens》や《esse》について、その「使用」と「言及」の区別を曖昧にしたまま、引用符をつけずたんに ens や esse と表記すること¹⁶⁾は、その ens や esse が、十の範疇に区分される実在と対立するもうひとつの実在を指示しているかのような誤解を招く¹⁷⁾。

ケニーがトマスの「being 論」に首尾一貫性を見出せなかった¹⁸⁾のも、この「使用」と「言及」の区別を曖昧にしたまま議論を進めたからであると思われる。ケニーはトマスのテキストから析出した12の being について、「being の12のタイプないし be 動詞の12の意義 (senses)」と表現しているように、それが《ens》や《esse》という語の意義の区分なのか、それらの語によって意味表示される実在のタイプの区分なのか、つまり意味論なのか存在論なのかを曖昧にしている。その区別を曖昧にしたまま、12の being に首尾一貫性がないというのは、説得力を欠く¹⁹⁾。

3 意味論的2区分

では、《ens》や《esse》についてトマスが「2つの仕方で語られる」と説明

するとき、それはどのような区分なのか。この間に十分な解答を与えるためには、印欧語に特徴的ないわゆる be 動詞が、アリストテレスのギリシャ語《einai》や《on》から、注釈家たちのアラビア語（存在動詞とコプラ文型を峻別）を介して、トマスの時代のラテン語《esse》や《ens》へと、どのように変容したかについての歴史的考察が必要であろう²⁰⁾。だが、われわれの目下の関心は意味論的視点からの分析である。われわれの考えでは、「2つの仕方で語られる」《esse》や《ens》とは、要するに（1）「意味論的世界においてはたらく」《ens》や《esse》と、（2）「意味論的世界においてはたらし、外部とも関係する」《ens》や《esse》である。これは、意味論を基準としてその「内」と「外」を区別する、いわば「意味論的2区分」という解釈である。

「意味論的2区分」というわれわれの解釈は、トマスの一連のテキストを存在論的2区分とみなすフェレスや、存在論と意味論の区別を曖昧にしているケニーはじめ他の多くの研究者と一線を画している。さらに、「意味論的2区分」という解釈は、ギーチ²¹⁾やヴァイデマン²²⁾の意味論的解釈とも異なる。というのも、彼等はこの2区分を《esse》や《ens》の「意義」(sense)の種類の区別とみなしているが、われわれはこれを、たんなる「意義」の種類の区別ではなく、以下に詳しく述べるように「意味(意義)表示」と「意味表示(指示)」の区分と解釈しているからである。

われわれの「意味論的2区分」という解釈は、「表示」と「指示」、そして「意義」と「指示物」を区分する意味論的視点に基づいている。この視点は、アリストテレスのいわゆる「意味論的3角形」(semantic triangle)²³⁾についてのトマスの注解において与えられている。

……したがって、アリストテレスの見解に従って、魂の情態はここでは名指し語、述べ語、文が直接的に意味表示している知性の概念と理解すべきである。というのも、それら〔語や文〕は、意味表示の様態から明らかのように、実在そのものを直接的に意味表示することはありえないからである。たとえば、《homo》という名指し語が意味表示するのは、個体から

抽象された人間本性であり、したがってそれが個的人間を直接的に意味表示することはありえないのである。そこから、プラトン派の人々は、その語は離在する人間のイデアそのものを意味表示すると考えた。しかし、アリストテレスの見解によれば、このようなイデアは、その抽象性によって実在的に自存するものではなく、ただ知性のうちにしかない。それゆえ、アリストテレスにとって、[意味表示] 音声は直接的に意味表示するのは知性の概念であり、その概念を介して実在を意味表示すると語る必要があったのである²⁴⁾。

トマスはここで、「意味表示音声」すなわち言語表現が *significare* する2つの様態を「直接的」と「間接的」とに区分し、その結果、「直接的に意味表示されるもの」(*significatum immediate*) すなわち「知性の概念」(*intellectus conceptiones*) と、「概念を介して間接的に意味表示される実在」(*res significata eis mediantibus*) とを区分している。たとえば、《homo》という語は、「個体から抽象された人間本性」という「概念」を直接的に意味表示し、その概念を介して間接的に「実在」としての「個的人間」を意味表示する²⁵⁾。

このような「直接的意味表示」と「間接的意味表示」の区別は、記号論・意味論で言うところの、「表示」(*signification*) と「指示」(*reference/designation*) の区別にほぼ対応し、それによって意味表示される「概念」と「実在」の区別は、「意義 (*sense*) としての意味」と「指示物 (*referent*) としての意味」の区別にほぼ対応する²⁶⁾。 *significare* のこれら2つの様態を、われわれは《意味 (意義) 表示する》と《意味表示 (指示) する》という表現で区別する。たとえば、《homo》という語は、直接的には人間本性という知性の概念を「意味 (意義) 表示し」、それと同時にこの概念を介して間接的に個的人間という実在を「意味表示 (指示) する」。したがって、「意味 (意義) 表示する」というのは、意味論的世界における言語と概念との関係であり、他方「意味表示 (指示) する」というのは、言語と意味論的世界の外部との関係である。

ところで、このような意味論的分析は、「意味表示音声」すなわち「名指し

語」(nomen), 「述べ語」(verbum), 「文」(oratio) についての一般的説明であって, 「2つの仕方で語られる」《ens》や《esse》の説明とは別ではないのか。この問に対して, われわれの解釈では, このような意味論的分析は《ens》と《esse》に典型的にあてはまる。トマスによれば, 文を構成するすべての述べ語は《esse》を「含意し」(implicare)²⁷⁾, たとえば《currere》=《currentem esse》のように, 「述べ語はすべて《esse》と分詞に還元できる」²⁸⁾。つまり, 《S currit》は《S est currens》へと還元できるのである。そして, すべての文が《S est ...》という形式に還元できる以上, 《S est ...》という文の主語となりうる何であれ名指し語《S》は, 文法形式上, 《quod est》すなわち《ens》である²⁹⁾。したがって, トマスにおいて《ens》と《esse》は名指し語と述べ語のたんなる一例ではなくそれらを代表するプロトタイプと考えられており, 音声言語一般についての分析は典型的にそれらの語にあてはまるのである。

トマスによれば, 「それについて肯定命題を形成しうるものはすべて, たとえ實在に何もおこななくても, 《ens》と言われうる」³⁰⁾。逆に言うと, 《quod est》すなわち《ens》と言われうるものがすべて, 實在を指示するとは限らないのである。《ens》や《esse》によって代表される語(そしてそれを含む文)はすべて, 人間にとって理解可能な記号である限り, 当然意味論的世界において何らかの意義を有する。すなわち, 「意味(意義)表示する」。しかし, 必ずしもすべての語(や文)が, 意味論的世界の外部と関係する, すなわち「意味表示(指示)する」とは限らないのである。

したがって, トマスが言う「2つの仕方で語られる」《esse》や《ens》の区分とは, 要するに(1)「何らかの概念を意味(意義)表示する」すなわち「意味論的世界においてはたらく」《esse》や《ens》と, (2)「何らかの概念を意味(意義)表示し, 同時にその概念を介して實在を意味表示(指示)する」すなわち「意味論的世界においてはたらく, 外部とも関係する」《esse》や《ens》との「意味論的2区分」なのである³¹⁾。

4 「意味論的世界の外部とも関係する」《esse》や《ens》

では、「意味論的世界においてはたらしき、外部とも関係する」《esse》や《ens》は、何を意味表示するのか。まず、《ens》から検討する。トマスは《ens》が意味表示するものを、「或るもの」(aliquid) [1], 「本性において存在する或るもの」(aliquid in natura existens) [4], 「実在の本質」(essentia rerum/rei) [2] [7] [8], 「心の外に存在する実在の本質」(essentia rei extra animam existentis) [5], 「実在の有性」(entitas rei) [11], 「十の範疇の本性」(natura decem generum) [12] などと多様に説明する³²⁾。これらの説明に共通するのは、「十の範疇に区分されるもの」(quod dividitur per decem genera) である。「十の範疇に区分されるもの」とは、実体、量、質、関係、場所、時間、位置、状態、能動、受動の十種類に区分される述語のどれかがある主語に当てはまるとき、「実在」の側でその述語に対応する実体や付帯性のことである。したがって、《ens》が上記のものを「意味表示する」ということは、十の範疇のいずれかの本性を「意味表示(指示)する」ということである。したがって、そのようなしかたで意味表示(指示)された ens は res と置換される [11]。要するに、上記の多様な説明は、《ens》の「意味論的世界の外部における指示物」についての多様な言い換えである。

つぎに、《esse》について考察する。それが意味表示するのは、「本質の現実態」(actus essentiae) [3], 「有の現実態」(actus entis) [6] [9], 「〈ある〉の現実態」(actus essendi) [10] である³³⁾。これらに共通するのは「現実態」(actus) である。しかし、《actus》という語を限定している《essentiae》, 《entis》, 《essendi》などはどう解釈すればよいのか。まず、《esse》が actus essendi を意味表示するということは、《esse》という語そのものは抽象名詞であるが、その指示物は「〈ある〉という動詞的現実態」であるということである。また、《esse》が actus essentiae や actus entis を意味表示するということは、《esse》が意味表示(指示)するのは、《ens》の指示物としての essentia や ens の現実態であるということである。要するに《esse》は、

「《ens》の意味論的世界の外部における指示物」すなわち「十の範疇のいずれかの本性」の「現実態」を意味表示（指示）するのである。

ところで、「意味論的世界の外部とも関係する」《esse》や《ens》を説明するときトマスが念頭においていたのは、存在文《S est》とコプラ文《S est P》のいずれ（あるいは両方）であるのか、という問題がある。トマスは、(1) 《S est》というタイプの文における《est》の意味について説明しているのか、それとも(2) 《S est P》というタイプの文における《est》の意味を説明しているのか。この問題は、アリストテレス『形而上学』第5巻第7章(1017a7-35)における「自体的オン」と「付带的オン」の解釈に関する大きな論点の1つでもある³⁴⁾。

アリストテレス解釈がどうであれ、はっきりしていることは、トマスは両方のタイプの例文を提示しているという事実である。『形而上学注解』において、トマスは、まず「存在様態」(modus essendi)から「述語付けの様態」(modus praedicandi)が帰結するということを確認した上で、ensは述語の種類にそくして区分され、その区分の名称が「述語形態／範疇」(praedicamenta)であると説明する。そして、こう言う。「《esse》は述語付けの様態の各々と同じものを意味表示する。たとえば、《homo est animal》と言われるとき、《esse》は実体を意味表示し、《homo est albus》と言われるとき、《esse》は質を意味表示し、その他についても同様である」³⁵⁾。この箇所ではあきらかに《S est P》のタイプの例文を念頭に置き、その《est》の意味がPの種類によって規定されると説明している。

他方、『命題集注解』において、《ens》は、実体であれ付帯性であれ、「本性において存在する或るもの」を意味表示すると説明した後、トマスは次のように言う。「実在において本性的エッセをもっているものはすべて、『ある』と肯定命題によって意味表示されうる。たとえば《color est》や《homo est》と言われる場合がそうである」³⁶⁾。この箇所ではあきらかに、トマスは《S est》というタイプの例文を念頭に置き、その《est》の意味がSの種類によって決定されると考えている。

したがって、《S est》や《S est P》の《est》が意味表示（指示）するのは、SやPによってその都度決定される、実体や付帯性の *esse* である。その意味で、《*esse*》は一義的ではない。ただし、トマスによれば³⁷⁾、《*esse*》は「現実性」という概念を共通に「意味（意義）表示し」、その概念を介して「現在・現実的にあること（*actu esse*）」を意味表示（指示）する。それは「何であれある形相や現実態の基体への現実的内在（*actualiter inesse*）」である。つまり、*actu esse* は、実質的には実体形相や付帯形相の基体への *actualiter inesse* なのである。

以上から明らかなように、「意味論的世界の外部とも関係する」《*ens*》は、十の範疇に区分される本性を意味表示（指示）し、《*esse*》はそのような本性が「現在・現実的にあること」を意味表示（指示）する。この「現在・現実的にあること」は、「形相の基体への現実的内在」であって、たんなる「存在」ではない。トマスの《*est*》に個物の述語としての意味、すなわち「『現在・現実性』意味」（‘the present-actuality’ sense）を認めたギーチも、この点でギーチに従ったヴァイデマンやケニーも、そしてギーチに反して《*est*》に個物の述語としての意味をいっさい認めないデイヴィスも、《*est*》が意味表示（指示）するのは個物の「存在」ではないという点では一致している³⁸⁾。

5 「意味論的世界においてはたらく」《*esse*》や《*ens*》

さて、「2つの仕方で語られる」《*esse*》や《*ens*》のもう一方は、「意味論的世界においてはたらく」《*esse*》や《*ens*》であった。「意味論的世界においてはたらく」ということは、何らかの概念を「意味（意義）表示する」が、その概念を介して実在を「意味表示（指示）する」かどうか、すなわち「意味論的世界の外部とも関係する」かどうかは決定されないということである。

上に述べたように（3節）、《S est ...》における主語《S》は、言語形式上《*quod est*》すなわち《*ens*》と呼ばれうるから、《*caecitas est in oculo*》[1]や《*malum est in universo*》[4]という命題が形成されるとき、《*caecitas*》も《*malum*》も文法形式上は《*quod est*》すなわち《*ens*》である。しかし、

すでに見たように(1節)、このような文の真の論理形式は、caecitasやmalumという概念に関して真なる命題が形成されうるということ、すなわち、「あるものに視覚が欠けている」「あるものに善が欠けている」ということであった。したがって、このような《ens》や《est》は「意味論的世界においてはたらく」けれども、「意味論的世界の外部とも関係する」かどうかは考慮されていない。トマスが「實在に何もおかない (in re nihil ponere)」「《ens》[1]や、「ラチオに属する (rationis)」「《esse》[5]と言うとき、この「意味論的世界においてはたらく」《ens》や《esse》を、意味論的世界の外部との関係から切り離して説明しているのである。

トマスはこのような《ens》や《esse》について、具体的には次の3つの説明を与えている³⁹⁾。(1)「命題の結合」(compositio propositionis)を意味表示する。(2)「命題の真理」(veritas propositionis)を意味表示する。(3)「～なるものがあるか」(an sit)の問に応答する「付帯的述語」(praedicatum accidentale)である。

(1)「命題の結合」とは、《S est P》と表現される知性の判断のことである⁴⁰⁾。SとPの「結合」は、「分離」(divisio)と対立する意味でのそれではない。トマスにおいては、SとPとの分離すなわち《S non est P》は、Sとnon-Pとの結合すなわち《S est non-P》と考えられていたからである⁴¹⁾。そして、《S est P》における《est》がこの結合を「意味表示する」ということは、すでに成立している判断を対象としてそれを「意味表示(指示)する」ということではなく、判断そのものを成立させるということである。トマスによれば、そのような判断すなわち結合は、まさに「私が《est》と言うことによってもたらされる」⁴²⁾からである。したがって、この意味での《est》は、意味論的機能というより、判断を成立させるという認識論的機能をはたしている。

(2)「命題の真理」は、知性の判断が實在と合致しているとき、その判断すなわち「結合において成立する」[11]。《S est P》における《est》が命題の真理を「意味表示する」ということは、すでに成立している真理を対象としてそれを「意味表示(指示)する」ということではなく、知性の判断を成立させ

るとき、同時にその判断の真理を「主張する」ということである。

現代では be 動詞の存在用法やコプラ用法と真理発言的用法はふつう区別されるので、《est》にこのような真理主張の機能を持たせることを疑問視する人もいる⁴³⁾。しかし、サールの言語行為論⁴⁴⁾によれば、たとえば誰かが「モンタギューは哲学者である」と言う場合、彼は「発言行為」(utterance act)と「命題行為」(propositional act)を行いつつ、その上にさらに「断言」という「発話内行為」(illocutionary act)を同時に遂行していると分析される。このような言語行為論の立場に立てば、コプラ《est》によって、述語を主語に繋ぐ「命題行為」とともに真理断言的発話という「発話内行為」を同時に遂行しているという分析は、われわれにとって違和感のない考え方である。

したがって、この場合の《est》は、意味論的というより、話者の真理主張という語用論的機能をはたしている⁴⁵⁾。

(3)「～なるものがあるか」(an sit)の問に応答する《est》は、「付帯的述語」(praedicatum accidentale)といわれる[4]。すでに見たように、《caecitas est》の《est》は「盲性なるものはあるか」という問に対して、「あるものは盲である」すなわち「あるものは視覚を欠いている」ということが真であることを意味表示する。すなわち $\exists x$ (x は盲である)の真理を主張する。この《est》が「付帯的」と言われるのは、それが十の範疇のうちの付帯性を意味表示(指示)するからではなく、それがまさに「意味論的世界においてはたらく」からである。というのも、「心や言語において真と主張されること」は、実在にとっては付帯的なことだからである⁴⁶⁾。

結 論

以上まとめると、トマス哲学の核心部分に《esse》や《ens》の意味論がある。それをトマスは、significareの2つの様態の区分として説明している。すなわち、(1)「意味論的世界においてはたらく」《esse》や《ens》と、(2)「意味論的世界においてはたらく、外部とも関係する」《esse》や《ens》との、「意味論的2区分」である。前者は、何らかの概念を「意味(意義)表示」し、

知性の判断を成立させると同時に判断の「真理を主張する」が、真偽の決定は意味論にとっては外的基準に委ねられる。後者は、何らかの概念を意味（意義）表示すると同時に、その概念を介して意味論の外部の实在を「意味表示（指示）」する。したがって、後者は前者の一部である。このように、《ens》や《esse》という語のはたらきを、意味論の「内」と「外」という視点から分析することが、彼の存在論を理解するための前提となる。

注

- 1) 本稿の表記法は以下の方針による。《esse》や《存在》といった引用符つきの表現は、その引用符で囲まれた表現そのものをあらわし、引用符のつかない esse や存在といった表現は、その表現の対象（概念であれ实在であれ）をあらわす。また「」は表現を強調し、（ ）は注記である。
- 2) cf. H. Weidemann, “‘Socrates est’/‘There is no such thing as Pegasus’: Zur Logik singularer Existenzaussagen nach Thomas von Aquin und W. Van Orman Quine”, *Philosophisches Jahrbuch*, 86, 1979, SS. 42-59, (S. 43). ヴァイデマンは、トマスが「形而上学的存在論」(metaphysische Ontologie) と「論理学的言語分析」(logische Sprachanalyse) とをはっきりと区別していたとして、『形而上学注解』におけるトマスの次の言葉を引用する。In *VII Met.*, l. 17, n. 1658: *Logicus ... considerat modum praedicandi; philosophus .. existentiam quaerit rerum.*
- 3) B. Russell, “On Denoting”, *Mind*, 14, 1905, pp. 479-493. cf. L. T. F. Gamut, *Logic, Language, and Meaning*, The Univ. of Chicago Press, 1991, vol. 1, pp. 16-17.
- 4) cf. *De ente.*, 1; In *II Sent.*, 34, 1, 1, c; *De Pot.*, VII, 2, ad1; In *V Met.*, l. 9, n. 896.
- 5) トマスによれば、《Deus est》は「それ自体に関する限り」(quantum in se est), 自明な命題である。なぜなら、神は *suum esse* と同一であり、この命題の述語は主語と同一だからである。したがって、神の本質そのものに関しては、《Deus est》は、その文法形式どおり、述語《est》は神の存在を意味する。しかし、われわれはそれを知ることができないのである。cf. *S. T.*, I, 2, 1.
- 6) *S. T.*, I, 3, 4, ad2: *esse dupliciter dicitur: uno modo significat actum essendi; alio modo significat compositionem propositionis, quam anima advenit coniungens praedicatum subiecto. – Primo igitur modo accipiendo esse, non possumus scire esse Dei sicut nec eius essentiam, sed solum secundo modo. Scimus enim, quod haec propositio quam formamus de Deo, cum dicimus “Deus est”, vera est. Et hoc scimus ex eius effectibus, ut supra dictum est. (テクスト [10]).*
- 7) cf. *S. T.*, I, 2, 2; I, 12, 12.

- 8) S. T., I, 48, 2, ad2: ens dupliciter dicitur. Uno modo, secundum quod significat entitatem rei, prout dividitur per decem praedicamenta: et sic convertitur cum re. ... Alio modo dicitur ens, quod significat veritatem propositionis, quae in compositione consistit, cuius nota est hoc verbum 'est': et hoc est ens quo respondetur ad quaestionem 'an est'. (テキスト [11]). cf. S.C.G., III, 9; *In II Sent.*, 37, 1, 2, ad3.
- 9) cf. S. T., I, 2, 2, ad2: ... ad probandum aliquid esse, necesse est accipere pro medio *quid significet nomen*, non autem *quod quid est*: quia quaestio *quid est*, sequitur ad quaestionem *an est*.
- 10) cf. L.T.F.Gamut, 1991, vol. 1, p. 10 & p. 27.
- 11) cf. L.T.F.Gamut, 1991, vol. 1, p. 12.
- 12) cf. *Expositio Libri Peryermenias*, I, 5 (J. Vrin: Paris, 1989, p. 26, ll. 73-82). この区分は、中世論理学の用語では「形相的代示」(suppositio formalis)と「質料的代示」(suppositio materialis)の区別に相当する。
- 13) [1] (以後テキスト番号のみで引用する): ens per se dicitur dupliciter: uno modo quod dividitur per decem genera, alio modo quod significat propositionum veritatem. Horum autem differentia est quia secundo modo potest dici ens omne illud de quo affirmativa propositio formari potest, etiam si illud in re nihil ponat; per quem modum privationes et negationes entia dicuntur; dicimus enim quod affirmatio est opposita negationi, et quod caecitas est in oculo. Sed primo modo non potest dici ens nisi quod aliquid in re ponit; unde primo modo caecitas et huiusmodi non sunt entia.
- 14) 《dupliciter dicitur》の主語が、《ens》の場合 [1] [4] [5] [7] [11] [12], 《esse》の場合 [2] [3] [6] [9] [10], 《ens et esse》の場合 [8] が混在する。フェレスはこの事実に当惑し、「異常なこの用語法の実事」を説明できないという。cf. T. Veres, "Eine fundamentale ontologische Dichotomie im Denken des Thomas von Aquin", *Philosophisches Jahrbuch*, 77, 1970, S.S. 81-98 (S. 84, n. 13).
- 15) 次を参照。加藤雅人「トマス・アクィナスにおけるエッセの意味論」, 『哲学』日本哲学会, 第54号, 2003年, 204-214頁 (205-206頁)。
- 16) たとえば、フェレスは ens ut verum と呼び (Veres, 1970, S. 84), パニアー&サリバンは A2 existent と命名し (R. Pannier and T. D. Sullivan, "Aquinas on 'Exists'", *American Catholic Philosophical Quarterly*, 67, 1993, pp. 157-166), オコーラガンは ens_S と呼ぶ (J.P.O'Callaghan, *Thomist Realism and the Linguistic Turn*, Univ. of Notre Dame Press, 2003, pp. 182-189.)。
- 17) とくにそのような誤解に対してトマスは警戒している。《esse》については、'cum in re potius sit non esse' [5] と注意し、《ens》については、'primo modo ... non sunt entia' [1] と注意する。

- 18) cf. A. Kenny, *Aquinas on Being*, Oxford U. P., 2002, p. 189.
- 19) 次を参照。加藤雅人「トマス・アクィナスにおける『意味論的二区分』: 予備的考察」『中世哲学研究』京大中世哲学研究会, 第22号, 2003年, 16-29頁 (23-25頁)。
- 20) グラハムの研究はそのような試みの1つである。cf. A. C. Graham, "'Being' in Linguistics and Philosophy: A Preliminary Inquiry", *Foundations of Language*, vol. 1, 1965, pp. 223-231.
- 21) cf. Anscombe, G. E. M. & Geach, P. T., *Three Philosophers*, Oxford: Blackwell, 1961, p. 90; P. T. Geach, "Form and Existence", in A. Kenny, ed., *Aquinas: A collection of critical essays*, London: Melbourne, 1969, pp. 29-53 (pp. 42-47).
- 22) cf. H. Weidemann, "The Logic of Being in Thomas Aquinas", in S. Knuuttila and J. Hintikka, eds., *The Logic of Being: Historical Studies*, Dordrecht, Boston, Lancaster, Tokyo: D. Reidel, 1986, pp. 181-200 (p. 182). (in B. Davies, ed., *Thomas Aquinas: Contemporary Philosophical Perspectives*, Oxford U. P., 2002, pp. 77-95).
- 23) J.P.O'Callaghan, 2003, p. 15.
- 24) *Expositio Libri Peryermenias*, I, 2 (J. Vrin: Paris, 1989, p. 10, l. 97-112): ... et ideo oportet passiones anime hic intelligere intellectus conceptiones quae nomina et uerba et orationes significant, secundum sententiam Aristotilis: non enim potest esse quod significant immediate ipsas res, ut ex modo significandi apparet: significat enim hoc nomen 《homo》 naturam humanam in abstractione a singularibus, unde non potest esse quod significet immediate hominem singularem. Vnde Platonici posuerunt quod significaret ipsam ydeam hominis separatam; set, quia hec secundum suam abstractionem non subsistit realiter secundum sententiam Aristotilis, set est in solo intellectu, ideo necesse fuit Aristotili dicere quod uoces significant intellectus conceptiones immediate, et eis mediantibus res.
- 25) このテキストでは、意味表示の対象としての homo singularis が、たとえば「ソクラテス」というような「個体」(suppositum) なのか、それとも「ソクラテスにおいて個体化された人間本性」なのか、については述べられていない。
- 26) cf. W. Nöth, *Handbook of Semiotics*, Indiana U. P., 1990, pp. 92-102. 「ほぼ」と言うのは、トマスの《significare》には、「意味表示する」という訳語から連想される意味論的な側面だけでなく、「心理因果的」(psychologico-causal) 側面もあるからである。cf. P. V. Spade, "The Semantics of Term", in N. Kretzmann, A. Kenny, and J. Pinborg (eds.), *The Cambridge History of Later Medieval Philosophy*, Cambridge U. P., 1982, pp. 188-196 (p. 188). また、クリマによれば、直接的に意味表示される知性の「概念」(conceptio) は、話者が理解をともなって言葉を用いるときの「人間の意識や理解のはたらき」(acts of human awareness or understanding) という側面がある。cf. G. Klima, "The Semantic Principles underlying Saint Thomas Aquinas's Meta-

- physics of Being”, *Medieval Philosophy and Theology*, 5, 1996, pp. 87-141 (p. 98). さらに、われわれは「指示する」(refer to)ということをめぐる難しい哲学的議論を回避し、ここではトマスの言う「意味表示が実在にかかわる」(significatio refertur ad rem) [上記注12] という意味でさしあたり理解しておく。
- 27) cf. *Expositio Libri Peryermenias*, I, 5 (J. Vrin: Paris, 1989, p. 30, ll. 304-305).
- 28) *In V Met.*, l. 9, n. 893: Verbum enim quodlibet resolvitur in hoc verbum Est, et participium.
- 29) cf. *Expositio Libri Peryermenias*, I, 5, (p. 31, ll. 363): ‘ens’ nichil aliud est quam ‘quod est’
- 30) [1]: ... secundo modo potest dici ens omne illud de quo affirmativa propositio formari potest, etiam si illud in re nihil ponat;
- 31) 1つだけ《esse》の3区分について語っているテキスト[3]がある。われわれの考えでは、最初の2つの《esse》は、ともに「意味論的世界の外部とも関係する」《esse》であるから1つにまとめられ、結局2区分とみなすことができる。
- 32) 《ens》が significare するもの: [1] quod dividitur per decem genera, [2] essentiam rerum, prout dividitur per decem genera, [4] quod per decem genera dividitur: aliquid in natura existens, sive sit substantia, ut homo, sive accidens, ut color, [5] essentiam rei extra animam existentis, [7] essentiam rei et dividitur per decem praedicamenta, [11] entitatem rei, prout dividitur per decem praedicamenta, [12] naturam decem generum.
- 33) 《esse》が significare するもの: [3] ipse actus essentiae, [6] actus entis resultans ex principiis rei, [9] actus entis in quantum est ens, idest quo denominatur aliquid ens actu in rerum natura, [10] actum essendi.
- 34) cf. C. Kirwan, *Aristotle’s Metaphysics Book Γ, Δ, and E*, trans. with notes, Oxford, 1971, pp. 140-146.
- 35) *In V Met.*, l. 9, n. 890: oportet quod unicuique modo praedicandi, esse significet idem; ut cum dicitur homo est animal, esse significat substantiam. Cum autem dicitur, homo est albus, significat qualitatem, et sic de aliis.
- 36) [4]: omne quod habet naturale esse in rebus, potest significari per propositionem affirmativam esse, ut cum dicitur: color est, vel homo est.
- 37) cf. *Expositio Libri Peryermenias*, I, 5, (p. 31, ll. 395-404): nam ‘est’ simpliciter dictum significat esse actu, et ideo significat per modum uerbi. Quia vero actualitas, quam principaliter significat hoc verbum ‘est’, est communiter actualitas omnium forme uel actus, substancialis vel accidentalis, inde est quod, cum uolumus significare quamcunque formam uel actum actualiter inesse alicui subiecto, significamus illud per hoc uerbum ‘est’, simpliciter quidem secundum presens

- tempus, secundum quid autem secundum alia tempora;
- 38) cf. Anscombe & Geach, 1961, pp. 91-92; Weidemann, 1979, S. 53; Kenny, 2002, p. 190; B. Davies, "Aquinas, God, and Being", *The Monist*, 80, 1997, pp. 500-520 (pp. 511-512).
- 39) compositio を意味表示する場合 [2] [4] [9] [10], veritas を意味表示する場合 [1] [3] [4] [5] [6] [7] [8] [11], an est に応答する場合 [4] [11] [12].
- 40) cf. [3], [4], [6], [9], [10].
- 41) cf. *In V Met.*, l. 9, n. 895.
- 42) *Expositio Libri Peryermenias*, I, 5 (J. Vrin: Paris, 1989, p. 31, ll. 369-70): ipsam compositionem, que importatur in hoc quod dico 'est'.
- 43) cf. Weidemann, 1986, p. 184; Kenny, 2002, pp. 58-59.
- 44) J. Searle, *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge U. P., 1969.
- 45) 周知のように、言葉の意味とはその「使用」use であるというヴィトゲンシュタインの後期思想以後、意味論を超えた言語使用を主題とする「語用論」(pragmatics) という新領域が成立した。当初それは意味論を補完するものであったが、今や言語研究において意味論と並ぶ領域として確立した。オースティンやサールの「言語行為論」(speech act theory) もその1つである。cf. G. Yule, *Pragmatics*, Oxford U. P., 1998.
- 46) cf. *In V Met.*, l. 9, n. 896: Accidit autem unicuique rei quod aliquid de ipsa vere affirmetur intellectu vel voce.